

♪ 2018年度 **poco a poco** ♪
Nr. 22 2019年2月18日(月) 文責: プファイル・辰巳

春はまだ遠く・・・

日の出は7時半ごろ、日の入りが17時半ごろとなり、特に天気の良い日は朝焼けのみごとさに、通勤途中、つい見とれてしまうことがあります。寒い日はまだ続きますが、小鳥の声などを聞くと、春も少しずつ近づいて来ているのかなあと感じられ、うれしい気持ちになりますね。

でも、春はお別れの季節でもあります。音楽の時間にも「6年生を送る会」や「卒業式」に向けて、お別れの曲をたくさん歌っています。3学期はあと約1か月。一日一日を大切に、すてきな思い出を、たくさん作っておいてくださいね。



3学期 ミニコンサート

申し込み締め切りは、明後日2月20日(水曜日)

放課後まで受け付けます。

ミニコンサート出演を考えている人は、締め切りが迫っていますので、早めに申し込みを済ませましょう!

<作曲家のこの一曲 ㊶ ピョートル・チャイコフスキー

「弦楽セレナーデ」八長調 作品48>

ロシアを代表する作曲家チャイコフスキーは、新人演奏家の登竜門「チャイコフスキー・コンクール」などでも名前が知られていますね。さて、みなさんは、チャイコフスキーの代表作品といえば、何を思い浮かべますか。バレエ音楽の「白鳥の湖」や「くるみわり人形」でしょうか、それとも、交響曲第6番「悲愴」でしょうか。あるいはコンクールでよく演奏されるピアノ協奏曲やヴァイオリン協奏曲でしょうか。

作曲家チャイコフスキーは1840年、ウラル地方のヴォトキンスクという町で生まれました。お父さんは鋳山技師だったそうで、ピョートルが幼いころから音楽に優れた面を見せていたにもかかわらず、音楽家になることには反対で、10歳のピョートル少年をサンクトペテルブルクの法律寄宿学校に送り込みます。法律学校を卒業したピョートルは、19歳で法務省の文官として勤め始めました。

しかし、音楽に対する思いは捨てきれなかったようで、21歳から音楽院で再度音楽を学びなおし、23歳で法務官は辞職、音楽家への道に専心するようになります。モスクワ音楽院で10年余り講師を務めた後、1878年からは、ヨーロッパ各地を転々と渡り歩きながら作曲を続けたそうです。アメリカ大陸まで足を伸ばしたこともあるそうです。



本日紹介します「弦楽セレナーデ」は、1880年の作品ということですから、このヨーロッパ放浪時代に作曲されたこととなります。チェコの作曲家スメタナが「弦楽セレナーデ」と並んで、2大弦楽セレナーデとして知られています。

第1楽章の出だしから、圧倒されるような弦楽の響きで始まります。この楽章は「モーツァルトへのオマージュ」だそうで、彼の音楽様式が模倣されているそうです。2楽章の軽やかな「ワルツ」、3楽章の哀愁に満ちた「エレジー」と続き、第4楽章ではロシア民族音楽のメロディが主題となって現れます。最後に曲の冒頭で使われた主題が繰り返され、フィナーレを迎えます。

YOUTUBEで、1991年、若かりし頃の澤征爾が、サイトウキネンオーケストラを率いて演奏するチャイコフスキーの「弦楽セレナーデ」を見つけました。エネルギーと情感のありったけを注ぎ込んで指揮する世界のセイジ・オザワの姿が印象的でした。

ほんのちょっとだけ 演奏会情報

2月28日(木)、3月1日(金) 両日とも 20時から
アルテオーパー・大ホールにて
HR(ハッセン放送局)シンフォニーオーケストラの演奏
チャイコフスキー 交響曲第4番
ドビュッシー ラプソディ ほか